

アルバイト活動における基本的心理欲求充足間の関係
—在日外国人留学生を対象とした検討—

Interrelations among Basic Psychological Needs Satisfaction in Part-time Employment
—A Study of International Students in Japan—

閻 琳

YAN, Lin

堀内 孝

HORIUCHI, Takashi

アルバイト活動における基本的心理欲求充足間の関係¹

—在日外国人留学生を対象とした検討—

閻 琳* 堀内 孝**

問題と目的

「留学生30万人計画（文部科学省・外務省・法務省・厚生労働省・経済産業省・国土交通省，2008）」を契機に，在日外国人留学生の数が増加しているが，それらの留学生の大半がアルバイト活動に従事していることが指摘されている（閻・堀内，2019）。本研究を執筆している2020年8月時点のコロナ禍においては，アルバイト需要は多くはないが，コロナ騒動が終息し経済が回復基調になれば，留学生のアルバイト労働力は，再び，日本産業の下支えとして重要な役割を担うことが予測される。

学生にとってのアルバイト活動は，実社会の中で一人前の労働者として扱われる初めての体験であり，金銭の価値や進路，社会での義務や責任を考え始める社会化の良い契機になることが指摘されている（若林，2006）。また，井芹・河村（2013）は，アルバイト集団で2年以上活動している大学生は，それより短い者と比較して，かかわりのソーシャル・スキル得点が高いことを見出している。加えて，在日外国人留学生にとってのアルバイト活動は，学校以外の日本人社会に接する貴重な機会でもある。それ故，アルバイト活動は，在日外国人留学生の社会化を促進すると同時に，日本文化に対する理解を深め，日本的な対人関係能力を高めることが期待される。

そのようなアルバイトの効用を勘案して，閻・堀内（2017a，2017b，2019）は，自己決定理論（Self-determination theory: Deci & Ryan, 1985; Ryan & Deci, 2000）に立脚し，在日外国人留学生のアルバイト活動に関する一連の研究を行っている。自己決定理論は動機づけ現象全般に関わる理論であり，認知的評価理論（cognitive evaluation theory），有機的統合理論（organismic integration theory），因果志向性理論（causality orientations theory），基本的心理欲求理論（basic psychology needs theory），目標内容理論（goal contents theory），関係動機づけ理論（relationships motivation theory）という6つの下位理論によって構成されている。本研究では，自己決定理論の下位理論の1つである基本的心理欲求理論に着目する。基本的心理欲求理論では，人間の基本的な欲求として自律性欲求（need

¹ 本研究は，立命館大学研究推進プログラム（科研費獲得推進型）の助成を受けた。本研究にご参加いただきました調査協力者の皆様方に厚く御礼申し上げます。

* 立命館大学総合心理学部特任助教

** 岡山大学大学院社会文化科学研究科教授

for autonomy), 有能感欲求 (need for competence), 関係性欲求 (need for relatedness) という3つの欲求が仮定されている。自律性への欲求は, 自ら行動を起こしたいという欲求である。有能感への欲求は, 環境との相互作用の中で個人の能力を表現したく, また, 行動を通して能力を高めたいという欲求である。関係性への欲求は, 他者と良い関係を持ちたいという欲求である。これらの心理的欲求の充足が精神的健康をもたらすとされる (Ryan & Deci, 2000; 櫻井, 2009)。また, 3つの心理的欲求充足間の関係について, Sheldon & Niemiec (2006) は特定の欲求が突出している状態よりもバランスのとれている状態の方が健康であると主張している。しかしながら, 吉崎 (2016) では必ずしもバランス状態と学校適応の間には明確な関係は認められなかった。一方, 櫻井 (2017) は親子関係や教師と子供の関係の観察から, 充足には, 「関係性欲求→有能感欲求→自律性欲求」という順序性がある可能性を示唆している。

閻・堀内 (2019) は, 在日外国人留学生のアルバイト活動における関係性欲求と有能感欲求の充足が直接的に職務満足感を高めると同時に, 3つの心理的欲求の充足が自律的な動機づけを介して間接的に職務満足感を高めることを見出している。また, アルバイト活動における3つの心理的欲求充足の相互関係について, 閻・堀内 (2019) はパス解析を用いて検討を行い, 「関係性欲求の充足」から「有能感欲求の充足」への正のパス, 「有能感欲求の充足」から「自律性欲求の充足」への正のパスを見出している。しかしながら, 閻・堀内 (2019) の分析は横断データを用いたものであり, 厳密には3つの心理的欲求充足間の因果関係に言及することができない。

そこで本研究では, アルバイトの繁忙期である年末年始を挟んだ12月初旬と翌年3月初旬の2時点で測定された縦断データを用い, 交差遅延効果モデル (cross-lagged effects model) および同時効果モデル (synchronous effects model) を使用して, 在日外国人留学生のアルバイト活動における3つの心理的欲求充足の因果関係について検討する。交差遅延効果モデルは, 2時点間の同一変数の自己相関を統制したうえで, 2時点における異なる変数間の因果関係を推定する研究方法である。剰余変数の影響は完全には排除できないが, 因果の方向性を推定するうえでは有効性を持っている。ちなみに, 交差遅延効果モデルは測定時点の間隔が長すぎると, 因果関係が見出されなくなる場合があり, このような場合には同時効果モデルの使用が適切であると考えられる。同時効果モデルは, 2時点間の同一変数の自己相関を統制したうえで, 第2測定時点での変数間の関係を記述する研究方法である。

方 法

調査協力者および手続き 日本語学校に在籍する外国人留学生294名に対して2回の質問紙調査を行った (Time 1: 2019年12月, Time 2: 2020年3月)。2時点双方で回答が得られたデータのうち, 記入もれや回答ミスのあるデータ, 在留資格が「留学」ではない者のデータ, および, アルバイト

経験のない者のデータを除き、有効回答者145名（男性72名、女性73名、平均年齢は21.70 ($SD=2.99$) 歳)のデータを分析対象とした。調査手続きは、各学校の担当教員に、質問冊子の日本語が回答する留学生にとって平易で分かりやすい表現になっているかについて確認してもらったうえで、講義時間中において、筆者または授業担当教員が集団調査を行った。本調査の目的、調査への参加は自由であること、回答しにくい項目や意味がわかりにくい項目に対しては飛ばしてもいいこと、および、調査による不利益は生じないことについて口頭で説明したうえで、質問紙への回答を依頼し、その場で回収した²。

調査内容 (1) アルバイト活動における基本的心理欲求尺度 (関・堀内, 2019) を用いた。この尺度は、アルバイト活動における基本的心理欲求の充足を尋ねるものであり、「関係性欲求の充足」、「自律性欲求の充足」、「有能感欲求の充足」の3因子からなる。「関係性欲求の充足」因子は、「仕事先の人とうまく付き合っている」、「仕事先の人のが好きだと思う」、「仕事先において自分がグループの一員だと感じる」という3項目から構成される。「自律性欲求の充足」因子は、「自分のやり方で仕事することができる」、「自分で仕事の順序を決めて働くことができる」、「仕事をどのように完成させるかについて自分で決めている」という3項目から構成される。「有能感欲求の充足」因子は、「仕事を通して達成感を感じる」、「仕事を通して自分が有能な人間だと感じる」、「仕事を通して新しいスキル (技術や知識) を身につけることができる」という3項目から構成される。「アルバイト活動において、以下の項目は、あなたにどの程度あてはまるでしょうか。6 (非常にあてはまる) から1 (全くあてはまらない) の数字のうち最も近いもの1つを○で囲んでください」と教示し、6件法で回答を求めた。(2) フェイスシート：学年、年齢、出身国、在留資格、アルバイトの職種、勤務時間 (時間/回)、勤務頻度 (回数/週)、継続年数、携帯電話番号の下4桁について尋ねた。

結 果

調査協力者の内訳 分析対象となった調査協力者の国籍は、中国 (86名)、ベトナム (38名)、ネパール (17名)、スリランカ (1名)、フィリピン (1名)、メキシコ (1名)、ロシア (1名) によって構成される。勤務頻度は週に平均3.61 ($SD=1.19$) (Time 1) / 3.60 ($SD=1.15$) (Time 2) 回、毎回の平均勤務時間は5.21 ($SD=1.52$) (Time 1) / 5.25 ($SD=1.51$) (Time 2) 時間、アルバイト活動

² 本調査では、留学生が調査への参加を自由に選択することを保障するため、ブリーフィングする際に、「本調査への参加は自由です。参加したくない方は、回答せずにそのまま提出すれば結構です」と口頭で教示した。実際、在日外国人留学生320人を対象に質問紙を配布したが、そのうち、294人が回答してくれた。回答しなかった留学生は、すぐに質問紙を提出して退室した者もいれば、友人が回答を終えるまで教室にとどまった者もいた。また、今回の質問紙では、個人名の記入を求めなかったため、回答しなかった留学生が特定されることはなく、回答の有無による不平等は生じないと考えられる。

の平均継続年数は10.21 ($SD=7.33$) (Time 1) / 12.15 ($SD=6.69$) (Time 2) ヲ月であった。職務内容については、飲食店のホールスタッフやコンビニエンス・ストアの店員のような接客の仕事が最も多く(82名), 次は、調理補助や洗い場, スーパーでの惣菜の仕事(48名), 工場での製造の仕事(25名), 介護の仕事(4名), 新聞配達の仕事(3名)となっている。

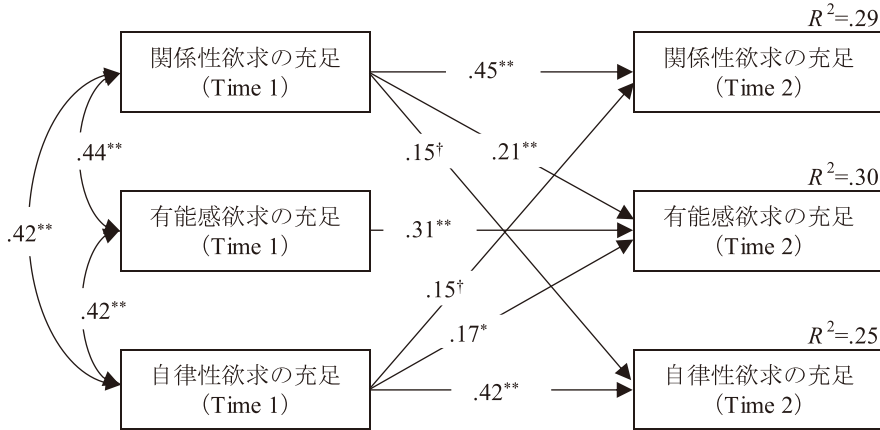
アルバイト活動における基本的心理欲求 Time 1 と Time 2 のデータに対して因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行った結果, 閻・堀内(2019) とほぼ同様の「関係性欲求の充足」因子, 「自律性欲求の充足」因子, 「有能感欲求の充足」因子から構成される3因子構造が確認された。信頼性係数 α を算出したところ, Time 1 は.62~.75, Time 2 は.78~.83であり, 一定の内的整合性が確認された。そこで, 下位尺度毎に項目の加算平均を下位尺度得点として算出し, 各下位尺度の記述統計量および下位尺度間の相関を Table 1 に示した。

Table 1
各下位尺度の記述統計量および相関係数

	<i>M (SD)</i>	Time 1				Time 2	
		1	2	3	4	5	6
Time 1							
1. 関係性欲求の充足	4.51 (0.85)	—					
2. 自律性欲求の充足	4.24 (1.09)	.42 **	—				
3. 有能感欲求の充足	4.36 (1.06)	.44 **	.42 **	—			
Time 2							
4. 関係性欲求の充足	4.43 (0.95)	.52 **	.34 **	.35 **	—		
5. 自律性欲求の充足	4.35 (0.97)	.33 **	.49 **	.31 **	.57 **	—	
6. 有能感欲求の充足	4.19 (1.03)	.41 **	.38 **	.53 **	.65 **	.67 **	—

** $p<.01$

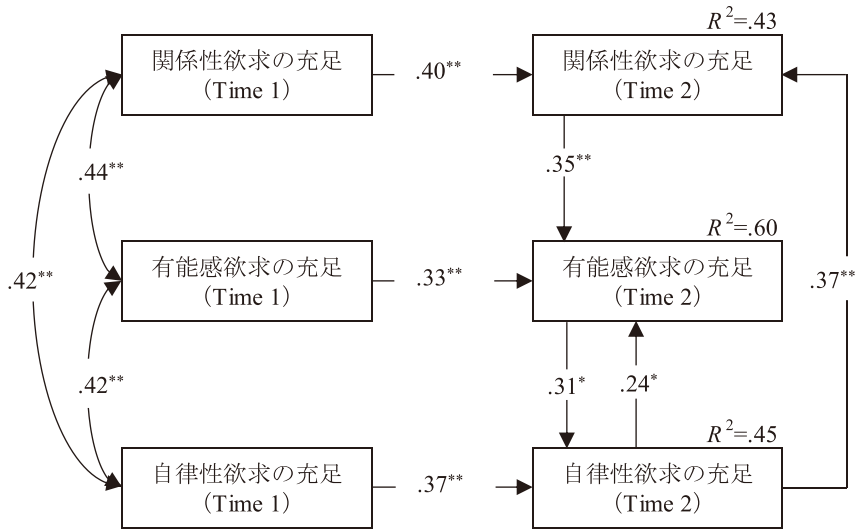
アルバイト活動における基本的心理欲求充足間の関係 在日外国人留学生のアルバイト活動における3つの心理的欲求充足(自律性欲求の充足, 有能感欲求の充足, 関係性欲求の充足)間の関係について検討するため, 交差遅延効果モデルによる分析を行った。その結果(Figure 1), まず, Time 1における3つの心理的欲求充足はTime 2の同一変数をそれぞれ.31以上の標準偏回帰係数(すべて $p<.01$)で予測することが示された。次に, 「関係性欲求の充足(Time 1)」から「有能感欲求の充足(Time 2)」に有意な正のパス($\beta=.21, p<.01$), 「自律性欲求の充足(Time 2)」に有意傾向な正のパス($\beta=.15, p<.10$)が得られた。また, 「自律性欲求の充足(Time 1)」から「有能感欲求の充足(Time 2)」に有意な正のパス($\beta=.17, p<.05$), 「関係性欲求の充足(Time 2)」に有意傾向な正のパス($\beta=.15, p<.10$)が得られた。モデル適合度は $\chi^2(2)=2.08 (p=.35)$, GFI=1.00, AGFI=.95, CFI=1.00, RMSEA=.02であった。



注. パス係数は有意なパスのみ表示, 誤差項と誤差相関は省略した。

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

Figure 1. アルバイト活動における3つの基本的心理欲求充足の交差遅延効果モデル



注. パス係数は有意なパスのみ表示, 誤差項と誤差相関は省略した。

** $p < .01$, * $p < .05$

Figure 2. アルバイト活動における3つの基本的心理欲求充足の同時効果モデル

また, 同時効果モデルによる分析を行った結果 (Figure 2), まず, Time 1における3つの心理的欲求充足はTime 2の同一変数をそれぞれ.33以上の標準偏回帰係数 (すべて $p < .01$) で予測すること

が示された。次に、同時効果モデルではTime 2において「関係性欲求の充足」から「有能感欲求の充足」に有意な正のパス ($\beta=.35, p<.01$), 「有能感欲求の充足」から「自律性欲求の充足」に有意な正のパス ($\beta=.31, p<.05$), また、「自律性欲求の充足」から「有能感欲求の充足」($\beta=.24, p<.05$) と「関係性欲求の充足」($\beta=.37, p<.01$) に有意な正のパスが得られた。モデルの適合度は $\chi^2(5)=2.00$ ($p=.85$), GFI=1.00, AGFI=.98, CFI=1.00, RMSEA=.00であった。

考 察

本研究では、2時点で測定された縦断データを用いて交差遅延効果モデルおよび同時効果モデルによる分析を行い、在日外国人留学生のアルバイト活動における基本的心理欲求充足間の相互関連について検討した。交差遅延効果モデルによる分析では、「関係性欲求の充足」から「有能感欲求の充足」への正の影響が見られた。また、同時効果モデルによる分析では、「関係性欲求の充足」が「有能感欲求の充足」に正の影響、「有能感欲求の充足」が「自律性欲求の充足」に正の影響をもつことが確認された。すなわち、在日外国人留学生のアルバイト活動において、関係性欲求が充足され、その充足が有能感欲求の充足を促進させ、さらに、有能感欲求の充足が自律性欲求の充足を促進する、という因果の順序性を示すものである。加えて、交差遅延効果モデルと同時効果モデルのいずれにおいても、「自律性欲求の充足」から「関係性欲求の充足」および「有能感欲求の充足」への正の影響が得られ、アルバイト活動における自律性欲求の充足が関係性欲求および有能感欲求の充足を促進することが明らかとなった。この結果は、前述の「関係性欲求→有能感欲求→自律性欲求」という因果の順序性に加えて、最後の自律性欲求から再帰的に他の2つの欲求に影響を与えるという、基本的心理欲求充足間における因果の双方向性を示すものである。

ところで、「関係性欲求の充足」から「有能感欲求の充足」への正のパスは、交差遅延効果モデルと同時効果モデルの両者に認められたことから、本研究の3ヵ月という測定間隔は、両変数の因果推定に適切であったと考えられる。しかしながら、「有能感欲求の充足」から「自律性欲求の充足」への正のパスは、同時効果モデルでは認められたが、交差遅延効果モデルでは認められなかった。この結果は、「有能感欲求の充足」から「自律性欲求の充足」への因果は、3ヵ月未満という比較的短期間に生起することを示すと同時に、基本的心理欲求の組み合わせの違いによって因果が生起するために必要な遅延期間が異なることを示唆するものである。「有能感欲求の充足」と「自律性欲求の充足」との関連については、今後の研究では、測定間隔を短縮して再検討することが必要であろう。

また、本研究では日本語学校に在籍する外国人留学生だけに限定しており、留学生の滞在期間が短いため、アルバイト継続年数が1年未満の留学生が全体の7割であった。アルバイト活動の継続年数や滞在期間といった変数が基本的心理欲求充足間に影響を及ぼすことが否定できないため、今

後の研究では、より幅広く調査対象者を選定し、これらの変数を含めて基本的心理欲求充足間の相互関係を検討することが必要であろう。

引用文献

- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum Press.
- 井芹まい・河村茂雄 (2013). 大学生のサークル・アルバイト集団における活動年数とソーシャル・キル活用との関連について 日本教育心理学会総会発表論文集, 55, 443.
- 文部科学省・外務省・法務省・厚生労働省・経済産業省・国土交通省 (2008). 「留学生30万人計画」骨子 Retrieved from https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/03/30/1383779_02.pdf (2020年8月25日)
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, 55, 68-78.
- 櫻井 茂男 (2009). 自ら学ぶ意欲の心理学——キャリア発達の視点を加えて—— 有斐閣
- 櫻井 茂男 (2017). 自律的な学習意欲の心理学 誠信書房
- Sheldon, K. M., & Niemiec, C. P., (2006). It's not just the amount that counts: Balanced need-satisfaction also affects well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 91, 331-341.
- 若松 養亮 (2006). アルバイトとインターンシップ 白井 利明 (編著) よくわかる青年心理学 ミネルヴァ書房
- 閻 琳・堀内 孝 (2017a). 在日外国人留学生を対象としたアルバイト動機づけ尺度の作成 パーソナリティ研究, 26, 99-108.
- 閻 琳・堀内 孝 (2017b). 在日外国人留学生を対象としたアルバイト動機づけ尺度の因子的妥当性に関する検討 岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要, 44, 175-188.
- 閻 琳・堀内 孝 (2019). 在日外国人留学生のアルバイト職務満足感——自己決定理論に基づく検討—— 心理学研究, 90, 178-186.
- 吉崎 聡子 (2016). 自律的動機づけに関する有機的統合理論と基本的心理的欲求理論の総合的検証 弘前大学大学院地域社会研究科博士論文 (未公開)

